

IMAJ

ニュース

国際MRA日本協会機関誌

発行年月日 昭和56年3月14日
発行所 国際MRA日本協会
発行者 柳沢錬造
(非売品) TEL. 03-821-3737(代)

NO.24

INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN 〒113・東京都文京区千駄木4-13-4



a dialogue on development

A report
from

INDIA.



主な内容

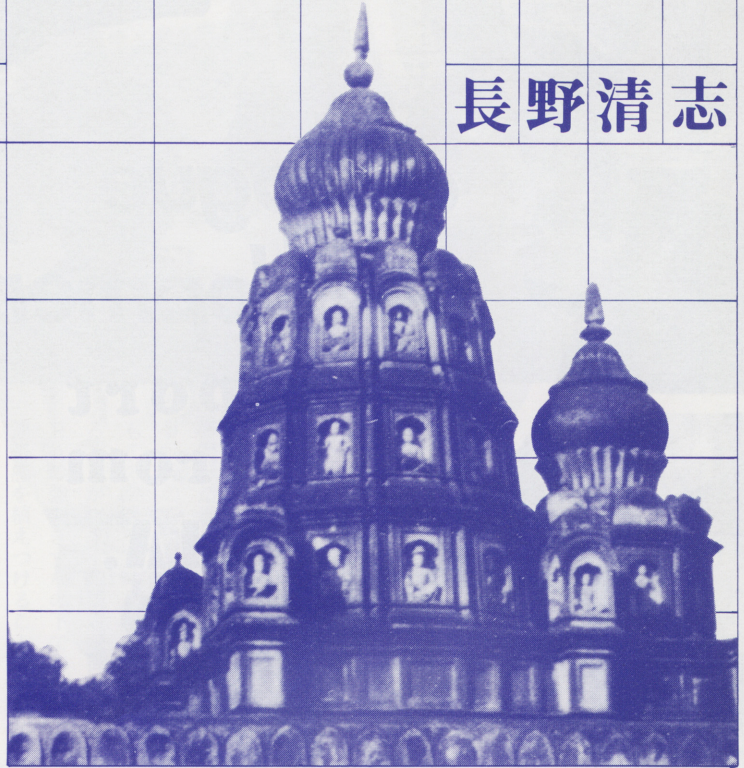
- MRAインド国際会議レポート
 - 「MRAハウスの誕生」 柳沢錬造
 - ニューイヤークャンプ インノルウエー
田辺澄子(オスロ)
 - 世界に翔け……………
 - 世界のMRAで活躍する日本人
 - MRA世界のセンターめぐりⅡ
パンチガニー(インド)
- その他

殆んど裸同然の小さな子供がコンクリートの道路にじかに寝かせられ、その側で酒に酔ったらしい母親が呆然自失としている。インドとはいえ一月のボンベイの夜風は時として膚寒い。見回せば同じような寝姿があちこちに散見される。インドだけでもこのように路上で生活する人の数は数十万人に上ると言われる。日本ではまったく見かけることのなくなった乞食もバスを待つ間にも入れかわり立ちかわりやってくる。貧困・飢餓・失業、そして人種や宗教の違いからくる軋轢などあらゆる種類の問題がここには存在する。原子力発電から人工衛星打ち上げに至るまで一方で優れた科学力を誇りながらも、オーストラリアの全人口に匹敵するような毎年の人口増が国の開発計画に大きな圧力となつてのしかかる。人口の八割までが農村に生活しているが、その多くは電気もガスも水道も無縁といった生活を余儀なくされている。このインドに象徴されるような発展途上国の開発とはどうあるべきか、また、先進国の役割は何かを卒

真の開発を求めて

パンチガニ
会議レポート

長野清志



第四世界からの声

直に語り合い同時に相互の理解と信頼を深めるため去る12月29日から1月5日にかけてインド・パンチガニのアジアプラトーにおいてMRA国際会議「開発のための対話」が開かれた。世界32ヶ国から35名余りが参加して貴重な体験・確信を交換することができたが、殊にフィリピン・マレーシア・インドネシア・シンガポール・スリランカ・韓国、そして日本とアジアの国々からの参加が目立った。そして今は難民となつてフランスやオーストラリアに定住している、ラオス・カンボジア・ベトナムというインドシナ三国の代表も揃つて参加した。勿論、インド各地からも広範な領域にわたる参加者―経営者、労組指導者、農村開発プランナー、ソーシャル・ワーカー、学生など―を得た。

会議にはいわゆる第四世界と称される少数民族の代表も多数参加した。インドからは現在パングラデッシュからの不法移民問題などで混乱状態にある東北部のナガランドやミゾラムなどからの少数民族の代表が参加し、

インドの他の地域の人々と卒直に話し合う機会を得た。また、カナダのインディアン、ノルウェーのサミー、そしてオーストラリアのアボリジニの代表などから、それぞれのアイデンティティを保ち、自然と調和を保っていくことを前提にして開発は進められるべきとの発言がなされた。オーストラリアの白人の参加者の一人は「アボリジニについて今までの全生涯に学んだよりもっと多くのことをこの短い大会の間に学んだ」と言い、「国に帰ったら鉱山開発に絡んで起きているアボリジニと鉱山会社の紛争の解決のため相互の理解を深めるべくお手伝いをしたい」とその決意を語った。又、アボリジニの青年も「この会議に参加して皆の心遣いを受けていく中で自分の持つ白人に対する恨みの感情が消えていくのを感じた」と述べた。同様の謝罪がカナダの白人からインディアンに対してもなされた。

相互理解の深まり

前記のようにこの会議の大きな目的の一つであった相互理解と信頼は色々な形で深められた。フィリピンの代表は「今まで自



談笑する北を代表する参加者

左からジェン キンス氏(イギリス)、増田敬作氏(姫路市会議員)、マッケンジー氏(イギリス)、グラハム氏(アメリカ)、ポウティエス氏(ニュージーランド)



インドシナからの報告は参会者の胸を打った。今は難民となったラン将軍(ベトナム)、ツワルン氏(カンボジア)、チャントラシー氏(ラオス)(左から)



インドでの新年を祝う日本代表とカトリ夫妻(センター責任者)



第四世界(少数民族)の代表達

分の国を植民地化したアメリカと、かつては軍事的にそして現在は経済的に支配しようとしていると感じる日本に対し心を閉ざしていたが、それは間違っていると気が付いた。この両国に心を開いていきたい」と話した。その後、共に食卓を囲みながらアメリカそして日本の代表と更に交流を深め、協力を誓い合った。又、ベトナム難民の代表が「憎しみでなく愛をもって平和な祖国を再建したい」という願いを語った時、米国務省の外交官を務め、戦争中ベトナムで情報官をしていたことのある米国の一代表は演壇に上り、「自分はベトナムに対して冷淡で関心も払わず、時には敵意さえもった」と述べ謝罪をした。そして、ベトナム・ラオス・カンボジアの難民が共に同じ壇上から、「インドシナ半島に平和をもたらすために皆さんの力をお借りしたい」と訴えた。私達があって当たり前のように感じがちな故国・家庭・家族のいずれをも失った難民の訴えは先進国、発展途上国の別なく、全ての参加者の胸に響いた。また、ニュージーランドの代表は豊かな国が発展途上国の状況を理解し助けている

具体的な例として次のような話をしてくれた。「フィジーという国はその経済の多くを砂糖きびの栽培と輸出に負っているが、ニュージーランドで数年前小麦の価格が下がったとき、ニュージーランドの農民も砂糖きびを栽培したいと要望した。幸い政府はMRAを良く知っている農業関係者のアドバイスに従い、一部農民の圧力に屈することなく砂糖きびの栽培を許可しなかった。そのためフィジーの経済は大きなダメージを受けることなく、両国間の信頼は強められた。また最近も代表的な農業雑誌が化学繊維でなく麻製の洋毛を入れる袋の使用を奨励していた。何故ならバンングラディッシュはその経済の90%近くを麻の産業に頼っている訳で、ニュージーランドの農民が段々麻の袋を使うようになってきているのを嬉しく思う」と結んだ。また、発展途上国自身の中の貧富の差をつめるために働きたいという確信がインド人の参加者達から述べられた。

パンチガーニセンター自身の開発に果たす役割

この会議の開催されたパンチ

ガーニのMRAセンター自身の開発に果たしている役割は大きなものがある。インドでは木を切り倒して燃料に使った後、殖林を十分にせぬため、洪水を初めとする色々な問題が起きているが、このセンターでは早く成育する木の研究等殖林事業を積極的に推進している。殖林の重要性を認識した近隣の村から、苗木を分けて欲しいと注文が来るといふ。また新品種の農作物の開発を初めとして地域の農業技術振興に貢献している。そして、定期的に開かれる産業人セミナーや若い人を対象としたトレーニングコースを通し、態度や動機の変革を図り新しい国造りのための人材育成に努めている。例えばこのスタディーコースに参加した或る若い農村青年もその体験を会議で語ってくれた。教育を受ける機会を得た彼は、それにふさわしい仕事を都市で捜していたが、コースに参加する中で農業の大切さに気がつき、家に戻って一生懸命働いた結果、飛躍的にその生産性を高めた。これに刺激され彼の友人達も彼に見做い始めたという。

会議を終えて

この会議を通してインドの若者達の活躍はめざましいものがあった。自分達の体験をベースにして作った劇に、コーラスに、そして皿洗いにサービングにと会議を支える大きな力となった。彼らは数年前にMRAに会ってインスピレーションを得、チョウル（一部屋だけのアパートで平均十人が住むという）の子供達のために、夜、仕事を終えてから学校を開いているということだった。近々、幼稚園を開設するというスラムにも案内してくれた。インドのような国で圧倒的な貧しさに直面させられるとき、ややもすると絶望的な気持ちになりがちなものだが、このような青年達を初めとする、真剣に開発に取り組む人々と会うことにより希望を抱かせられる。日本のすぐ近隣にこのような国々のあることをいつも心に刻み、どのようにそれらの国々の国作りのお手伝いが出来るかを真剣に考えなければならぬと改めて痛感させられながら、帰国の途に就いた。

ダイアログ・オン・デベロップメント



兼松 正
(神戸日豪協会々長)

昨年十二月二十九日から一月五日迄八日間インドパンチガーニのMRAセンターでMRAの国際会議が開催され幸いに日本代表の一人として参加することが出来た。出席者は三十二ヶ国から約三百五十名余、主題はダイアログ・オン・デベロップメント（進展を目指しての語り合い）。基調講演に引続き分科会の協議そして全体会議と言う形式でなく、各自が自由に演壇から語ると聴衆が夫々自由にそれについて意見を述べる。それに対して更に別の者が意見を言う、と言うような語り合いで会議が進行された。ベトナム・ラオスカンボジア等の難民問題、石油輸出機構、アフリカの政治事情貿易摩擦の問題、少数民族の問題等が語られたが殊に少数民族の問題について、アボリジ族（オーストラリア）、ラップ族（ルルウェー）、インディアン（カナダ・北米）及インド北部国境地帯の少数民族等の代表者達が夫々に自分達の民族文化の伝統と歴史が優秀であることを強調して夫れらが如何に差別と圧迫と迫害の下に苦しみつつあるかについて語った。出席者達は真剣に耳を傾け彼らの事を理解しようとして努力した。其の場だけの応答のみでなく食事の時間、お

茶の時間等を利用して更に個人的に詳しい語り合いが行われ、文字通り対話による進展、或いはよりよく理解し合うための語り合いの場であった。

R・D・マツァー、R・M・ラーラ、ニケツ・イラール、ラジモハン・ガンジー等、インドMRAの指導者達による良い準備と、アーチ・マッケンジー、スベリー氏等の協力に依って運営されたが同時に又、三十年代以下の若い人達の熱心な奉仕に依って凡ての会議がスムーズに運ばれたことはすばらしかった。日本からは他に増田（姫路）、庄司（水戸）長野（MRAオフィス）の諸氏が参加し又、中島めぐみ、市橋佳枝、柴田節子（現在パンチガーニのMRAセンターでフルタイムの奉仕者として働いている）方々を含めて七名が夫々に積極的に参加した。中島めぐみさんは難しい同時通訳の仕事を受け持ち又、長野さんも増田氏の通訳を食卓又は色々の場合に進んでやって下さった。二十五年振りにMRAの運動に復帰した増田さんの真剣な態度が各々の人々から心から歓迎されたことは良かった。又、初めて参加した水戸の庄司さん

はアメリカで心理学を学んだこともあって英語も達者なこと、そのお人柄によって各々の人々（殊に各国の若者達）に常に積極的に話しかけ良い人間関係を作っていたことは素晴らしいものと思う。

開会の言葉としてB・K・ルー氏が語ったことの一つに、異った生活をし異った考え方をもち、異った生活を生きている貧富の差のある人々の間の共通理解を持つことが困難なことは明瞭である、とあったが卒直な語り合いの中に一週間も経たぬうちに相互の理解と意志の疎通が行なわれ始めて、第三世界とか、富める国とか、貧しい国と言うレッテルを外して内部の色々な真実を理解するに従って最初、双方が抱いていた障害が取り除かれ始めたのであった。インドシナの代表達が憎しみを捨て心から有るしの証しを述べた時、すばらしい感動が私達の胸を打ったのであった。

予期した以上の数々の感動と喜びを抱いて日本に戻ることが出来て幸いである。殊に少年時代聖雄ガンジーの愛の無抵抗主義による救国運動を知って感激し憧れたそのガンジーの孫、

ラジモハン・ガンジー氏と会ってMRAの精神を通して親しい交わりを持つことが出来た感激は忘れることが出来ない。

対立する人と人、階級と階級、民族と民族との障壁を打破するためのダイアログ、オン・デベロップメント（進展のための対話、語り合い）を持つときに最も必要なことは神との対話、一祈りとガイダンスであることを忘れてはならない。



パンチガーニ全景

御案内

国際MRA日本協会は、倫理性と調和をもった世界作りのため、世界のMRAチームとの連繋のもと諸般の活動を行っております。毎年開催される国際産業人会議もその一環であり相互理解と信頼の絆は年々強まっております。他にも人材育成のための研修生の海外派遣、研究会、講演会の開催等々、日本人の『心の開国』を推し進めるために活動しております。ぜひこの活動にお加わり下さい。御入会下さった方にはニュース初め各種会合の御案内をさせて頂きます。

一、会費

個人（特別）月額 一〇〇〇〇円

個人 一〇〇 五〇〇〇円

法人 一〇 五〇〇〇〇円

（共に年額）

一、払込先

第一勧業銀行代々木支店

（普）一六三一〇一四

三三六

住友銀行新宿西口支店

（普）二五九一四一八三

七九

富士銀行動坂支店

（普）八六一二二〇

国際MRA日本協会宛

M R A ハウスの誕生

柳沢錬造

念願の新M R Aハウス文京区千駄木にオープン。田端駅より徒歩10分!!

M R Aの創始者ブックマン氏

は、「必要なものは必要なときに与えられる」と、言われましたが、この言葉がピッタリと当てはまるのが、今回の田端のM R Aハウスの誕生といえましょう。

昨年十二月のM R A集会で、

日本の将来について考へ、何をなすべきかと折り、ガイダンスをもちましたとき、代々木の事務所が狭くなり、もう少し広い事務所があったら、という考えも出されました。

その翌日、水戸の星さんが、ガイダンスで島田さんにお話をしましたら、トントン拍子で話が進み、田端の島田さんのお家が貸していただけることになりました。

私は、このことを妻から、旅行先に電話で知らされましたが、その時「あの集会の部屋に神さまがいた」と、直感しました。これも星さんが、ガイダンス

を勇気をもって実行されたからであり、そのことに感謝し、島田さんが私たちのM R A活動を理解して、使わせて下さることになったのであり、そのことを皆さんと共に感謝したいと思えます。

こうして一月の常任理事会で、正式に借りのことを決定しましたが、そして水戸の市橋さんが、襖の唐紙の張替えをして下さるといい、埼玉の北口さんが、トラックを持ってきて引越し荷物を運んで下さることになり、二月九日には田端の家への移転が完了し、新しいM R Aハウスが誕生しました。

考えてみれば、今ほどM R Aを必要としている時はありません。

日本の国は、羅針盤を失った船のようなもので、どこに向って走っているのかサッパリわかりません。何が問題なのかは、

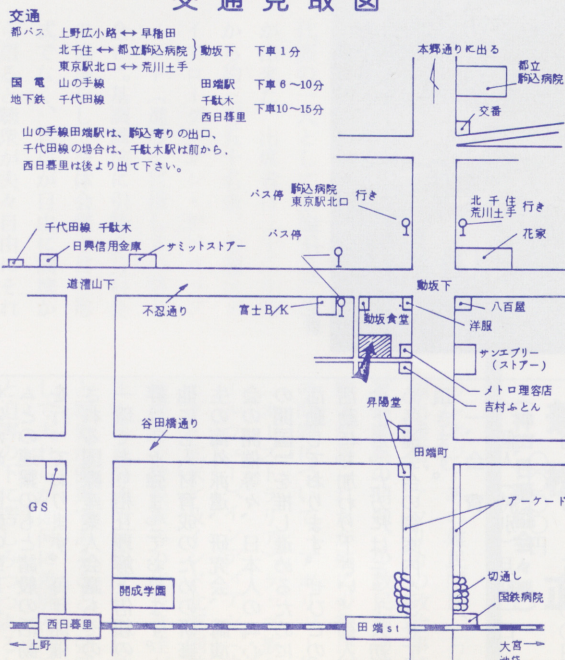
誰にでもすぐ指摘ができる程、沢山あります。だが、問題をどんなに取上げて、教えあげても、それが問題の解決には何の役にも立ちません。

ブックマン博士は、「自分のあり方が国のあり方であり、国を変えようと思うならば、まず自分が変れ」と、よく言われましたが、そのことを考えてみたい

です。いま、多くの若い人々が、フルタイムになって、すべてを捧げて、この活動のために献身しています。日本だけでなく、ヨーロッパに、アジアに、濠洲にと世界の各地で活躍してくれています。本当に感謝です。

この新しいM R Aハウスの誕生こそ、私たちに、更に大いなる活動を展開せよ。時間のある内に闘え。この日本の国を救え。という声が聴こえてくるようです。

交通見取図



二月二十二日

オープニングパーティー開催!!

外国人ゲストも交え盛況のうちに終了。
今後のMRA活動にダイナミックな広がりを
与えるハウスの効果的な活用に大きな期待。



加藤シツエさん、ハウスの持ち主島田さん、そして海外からのゲストの皆さんを前に、ハウスの意義、そして役割を語る柳沢理事長

広い二十畳の部屋も立錐の余地もないほどの盛況、テーブルの上には有志作りのご馳走がスラリ



加藤さん、江田五月さんを中心にハイポーズ、新しいハウスを持つ喜びに皆の顔もついほころぶ。

新MRAハウスのご案内

国際MRA日本協会は昭和50年に発足以来、旧代々木事務所にて業務を続けてまいりましたが、此度、左記のとうり事務局を移転しましたので、お知らせいたします。

新事務所は単に従来までの機能にとどまらず、MRAハウスとしての幅広い活動が期待されています。色々な方々の交流の場としてはもちろんのこと、これまで以上に多様な催しが可能です。又、皆様のアイデアやアドバイスもお受けして創造的な使い方をしたいと存じますので、是非、ご協力いただきたいと存じます。お近くにおいでの際はどうぞお気軽にお立ち寄り下さい。尚、今後とも当協会の趣旨をご理解の上変らぬご支援を下さいますようお願い申し上げます。

旧住所 〒151 東京都渋谷区代々木一五七二

ドルミ代々木 308

新住所 〒113 東京都文京区千駄木四一三三四

TEL 03 (八二一) 三三三七(代)

皆様の必要が神によって与えられたことに対し、感謝の気持ちと共にお慶び申し上げます。

ジャック・ケネディ
(オーストラリア)

新しいMRAセンターのオープンをお祝い申し上げます。
アメリカと日本が人類に新しい光を運ぶMRAの精神のもとに共に立ち上がるではありませんか。

アメリカMRAチーム

ハリー・アーモンド

スチュアート・スミス

ステイブ・デイキンソン

ディック・ラッフィン

ボブ・ウェップ

ジョン・ヴァンダウォーター

ご盛會を祝します。益々のご発展を祈ります。

衆議院議員 鈴木 強

寄せられた祝電

暮も押し寄せまった12月中旬成田空港。田辺さんは厳寒のノルウェーをめざし、機上の人となった。道中コペンハーゲンで一泊した彼女は次の日、期待と不安の入りまじった第一歩をオスロ空港の大地にしろした。彼女からの第一声をお伝えする。

私は去る12月27日から1月1日まで、オスロの北東百キロ、車で一時間半のところにあるオプサルという農場のコテージにて、ノルウェー、スエーデンからの青年男女、約20名と共にキャンプをしました。丁度、クリスマスからニューイヤーにかかるバケーションにあたるため、会合と共に、昼間は体を鍛える時間も充分にあり、一時間半の会合のあとは、スキー、散歩などにランチを持参し、懇談の時間を楽しむことが出来ました。12月31日の夜はノルウェーのニューイヤーイブを体験しました。冬の火花を打ち上げ、讚美歌をみんなで唄いながら雪道を歩きます。教会の鐘があちこちで鳴

ニューイヤーキャンプ イン ノルウェー

田辺 澄子

りひびくその夜、遅くまでゲームをして楽しみました。

12月27日夕刻、参加者のほぼ半数が到着し、7時より当地ではいつもより遅い夕食をとり、自己紹介後、ミーティングが始まりました。ミーティングはいつもコーラスで始まります。背の高いノルウェー人のウーラの妹、ヘーゲがこの会合の責任をとっていました。彼女は非常に歌とギターが上手く、会合を盛り上げていました。さて、一夜明けて朝のミーティング。

「MRAは組織か、機構かどうか説明してよいかわからない。」という質問から始まりました。これは多分、MRAにとって古く新しい質問だと思えますし、日本を発つ前、ある例会の後にもった茶話会でも同じような話題が出ました。どこの国でも同じようなことを話していると興味深かったです。次の日、「MRAとは何か」というテーマでスエーデンのマリアがMRAのヨーロッパ10ヶ月講習を通じて学んだことを披露してくれました。その日の夜のミーティングでは、ノルウェーの教育制度についての議論が活発になされました。この制度について少々説明しま



左端が田辺さん

す。ノルウェーでは小学校から大学まで、教育費はすべて無料です。そして、ある一定の年令を過ぎると大方の若者は親元を離れ、独立して生計をたてます。たとえ、親と一諸に生活していても20才をすぎると学生であっても生活費を支払います。学生は州から学費を除く教科書代や生活費(住居費・食費・衣料費)にあたる費用をローンで借りられます。このローンは最高年額で2万5千クローネ(日本円で

約120万円?)まで借りることが出来ます。卒業後、利子をつけて返済することが義務です。しかし、最近この利子が引き上げられ多額のローンを借り入れた人々は、その返済がなかなか苦しくなっている状態で、この措置に抗議して学生がデモを行なったそうです。最近ノルウェーでは物価が非常に上昇しており、大学卒業後、結婚し、居を構え、子供を幼稚園に預けながら働く

と普通の人々にとってこのローンの返済が重くのしかかってくるのです。中にはこのローンを目一杯借りて、ビジネスに使うという不心得者もいるようですが、しかしながら、大多数の学生にとっては自らの力で勉強できるのは大きな特権であり、恩恵であるわけで、この点を十分に認識すべきだという意見もみられました。私はこの制度を非常にうらやましく思いました。すべての人々に対して均等にその権利が与えられている訳ですからこれを正しく使えば充分快適な学生生活を送れるわけです。しかし、同時に各人がその恩恵に感謝し、正しい使い方を心がけることが絶対に必要であると思います。それには個人の良心と責任に負うところが大きいと思います。次の日のミーティングでは「ほんとうの豊かさとは？」というテーマでディスカッションをしました。私も発言を求められました。(高度経済成長の時代に育った日本人の一人として)私のように豊かな国に生まれ育った者はその豊かさを当然だと思いがちで、貧しい国々のことや、自分の受けている恩恵がいかに大きなものであるか、仲々

気が付きにくいと思います。今日で10日目のノルウェー生活ですが、生活の基盤に対する考え方が違うのを感じます。たとえば、決して豊かではないといっている人でも、持家の他にコッチージを一軒持っていたりして日本では考えられないことです。その反面、食物や消費材(水とか紙)を大変大事に使います。「豊かな者が天国に入るのはラクダが針の穴を通るよりむしろ小さい」と聖書にあるように、例えば100与えられ、その中ではほんとうに必要な50を用いるのと、50与えられ50用いるのでは100与えられた者の方がはるかにむずかしい判断がいると思います。これは豊かな国に育った人間にとって大きなチャレンジだと思えます。まとまらぬまま書いてきました。忘れないようにと思いいレポートにまとめお送りします。



●ノルウェーのMRAハウス
ソーフース・リースガート
で活躍するヨーロッパの若
者達



●イエンツ・ウイルヘルムセ
ンさんの家族と共に

国際親善は家庭から

— 家庭滞在受け入れの御願い —

一日目、ハンセンさんが息子のブライアンとご自慢のマツダで港まで迎えに来てくれました。日本人が来ると聞いてはしゃいでいたというブライアンだが、ニコリともしない。(きつと照れているのさとハンセンさん)車中、今度は親父さんのほうが興奮気味だ。夜皆でテレビを見ていたら突然、奥さんのカレンが僕の背中にアイスクリームを入れようとした。ビックリしたけど反面、最初の日からそう扱ってくれることがうれしかった。しかし、これから先一体どうなることやら……。

三日目、犬のデュークと庭でかけっこをしていたら、ブライアンがとうとういっしょに遊びはじめた。言葉はお互い理解出来ないけど何だか気持が通じてきた。折り紙を教えてあげる。既製のおもちゃを与えてもすぐこわしてしまふとカレンがこぼす。

五日目、朝から日本料理の準備に忙殺される。メニューはカツ丼だ。材料は意外に手に入る。ハンセンさんが仕事を休んでスパーに連れていってくれる。初めて見る日本料理。皆んなワクワクドキドキしている。残さず食べてくれた彼らの友情に感謝しつつ床につく。

これはある日本人がデンマークの一般家庭に滞在した時の模様ですが、ホテル生活では得ることの出来ない生のふれあいが伝わってきます。前回、お知らせしました通り、近年日本を訪れる海外のMRA関係者は益々増えつつあります。協会ではこのような交流を日本で促進するため家庭滞在を引き受けて下さる御家庭(長期・短期)、或いは御家庭に招待して下さる方を探しております。御自身或いは御友人でもしそのような方がいられましたら是非当協会までご連絡下さい。

連絡先 〒113東京都文京区千駄木四一十三一四
国際MRA日本協会
TEL 03(八二二)三七三七代

世界に翔け

81.3月14日現在

海外のMRAで活躍する日本人たち

兼松 恵……………ケンブリッジ（アメリカ）

玉川大学を卒業後イスラエルのキブツに体験旅行。その後スイスのMRA世界大会参加。英国で10ヶ月トレーニングを受けたあと「ソング・オブ・アジア」というMRAの親善使節に加わり世界各国を訪問。その後ブラジルのMRAセンターでフルタイムとして約4年間活躍した。現在お姉さんが2人いるアメリカで活躍中。



市原登志子……………オックスフォード（イギリス）

79年、パンチガニー（インド）で開設された第1回トレーニングコースを受講。その後ロンドンのMRAハウスでMRA活動に従事。おだやかなしかし粘り強い人柄と日本女性らしい細やかな思いやりが持ち味。行く先々でこの人を通して日本に対する認識を変える人が多いという。



星 玲子……………ロンドン（イギリス）

77年アーマで開設された第1回スタディーコースに参加。やがて出版関係のチームに参加しオーストラリアをキャンペーンする。80年インド経由で英国に渡る。世界各国に輸出をするロンドンの書籍出版の本部で現在活躍中。妹の敦子さんも昨年秋オーストラリアへ向かった。お母さん譲りの歌ごえと美味しい日本料理が大好評。



柴田 節子……………パンチガニー（インド）

商社会社を退社後、54年9月オーストラリアにわたり、スタディーコースに参加。シドニー会議参加などを経て現在「オペレーション・パシフィック」と共にインドで活躍中。テニスが得意な明るいお嬢さん。お父さんが元警察署長で剣道もかなりの腕前。



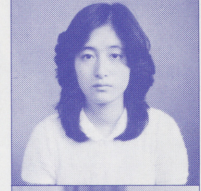
高橋 千恵……………メルボルン（オーストラリア）

80年にトレーニング・コース参加のためインドに。6ヶ月の滞在期間中に学校等でしばしば日本紹介に努め立派に民間大使の役割を果たした。その素直さと真面目さのため皆から愛される。現在、オーストラリアのスタディーコースを受講中。



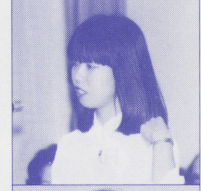
星 敦子……………メルボルン（オーストラリア）

昨春、高校を卒業後、英語学校に通いながら10月に離日するまでMRA事務所にて奉仕活動に従事。現在お姉さんも活躍したオーストラリアでスタディー・コースに参加中。球技、陸上、乗馬などなんでもござれのスポーツウーマン。



沖田 康子……………メルボルン（オーストラリア）

同志社大学英文科を卒業後家庭教師をしながらMRA留学の準備を進め昨年12月にオーストラリアへ渡る。父幸治氏は日立造船の職場を通してMRAを知り60年代にスイス・コーへ派遣される。最近も海外出張の度にブラジルやデンマークのチームと交流している。



田辺 澄子……………オスロ（ノルウエー）

商社会社に4年間勤務後、54年に退社。その後、産業人会議運営、その他のMRA活動を国内において約1年間続ける。昨年来、ノルウエーのイエンツ・ウイルヘルムセンさんの招待でオスロにわたる。今後しばらくヨーロッパを中心にMRAプログラムに参加の予定。カメラと水泳が特技。



MRA世界のセンターめぐり

第2回……アジアプラトー

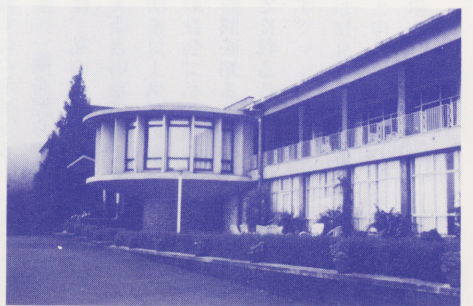
インド・パンチガニー

巻頭のレポートでお伝えしたとおり、昨年来より今年初めにかけてインドのMRAセンター、アジアプラトーで「ダイアログ・オンデベロップメント」(進展のための話し合い)をメインテーマにMRA国際会議が開催されました。会議の模様はレポートでお伝え出来たことと思いますが、このコーナーMRA世界のセンターめぐり第2回目はその会場となったアジアプラトーを皆様に御紹介したいと思えます。マハラシュトラ州にある工業の町プーナの近郊。ボンベイより南へ二四三キロの村、パンチガニーにセンターがあります。設計したのはオーストラリア人の建築家ゴードン・ブラウンさん

ん。ブラウンさんは全ての仕事を無料で奉仕したその上、センターが完成するまでに8回も、全て自費でインドを訪れました。さて、自分の事、又自分の国の事だけを考えてばかりいたり、言うだけでなく、実践する人を世界のすみずみに作るという目的のために、数多くの犠牲をはらってこのアジアプラトーは建てられました。

このセンターのユニークな点は、荒野をきりひらき、無から有を創り出したという点だと思えます。これは世界中に数あるMRAのセンターの中で唯一のもので、ある意味でMRAの証し、原点とも言えるでしょう。

二十年程前、数人の人々がインドの南端からニューデリーまで行進しました。六四〇〇キロもあったそうです。もしこの国(インド)を少しでも良い国にしたいと思うなら、最初に変わらなければならないのは自分自身なのです。行く先々で人々にこうチャレンジする行進でした。ケララ、マドラス、ベンガル、最後の地はニューデリーでした。行進はマハトマ、ガンジーの孫、ラジマハン・ガンジーと彼の仲間を先頭に行われました。その



結果としていろいろな場所での呼びかけに応えた人々がMRAのトレーニングを受けるために一番最初のキャンプ地がこのパンチガニーだったので。

人間は誰しも移動するセンターでなく、恒久的にそこに建つ物体をもとめるものです。

多くの人々の熱い祈りと世界中からの献金、奉仕によって近代的な、すばらしい、こんな言葉だけでは表現出来ないほど立派なビルが建ちました。アジアプラトーは西インド、マハラシュトラ州にあります。アジアのため、世界のために使ってくださいとセンターの人々は言っています。アジアには数多くの少

数民族がいます。大きなケアが必要とされています。アジアプラトーがアジアに位置する意義、そしてその使命は非常に大きなものだと思えます。

さて次回は毎年夏、世界中から何千人の人々を集めるスイスのMRAセンター、マウンテンハウスを紹介いたします。

尚、このコーナーは毎回レター執筆で行なっています。成るべく多方面の方々に御登場いただくつもりですのでご期待下さい。今回は平沢恵子さんにお問い合わせいたしました。有り難とうございました。

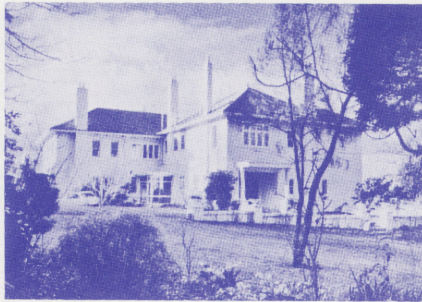
スタディコースを前にして

高橋千恵（オーストラリア・メルボルン市）

夏も盛りの今、気温が四十度を越える日もしばしばあるこのオーストラリアでのスタディコース開始も、いよいよ目前にせまりました。去年の五月にインドでやはり三週間のコースを受け、英語力不足ゆえに幾度もつらい思いをした私は、期待と不安の入り混じった気持ちで、十二日を持っていくところです。このコースには、私達日本人の他に、香港から一人、台湾から一人、ニュージーランドから三人（うち一人はマオリ（原住民）の女性）、インドから一人、そしてオーストラリアから三人と、十名以上の参加が予定されています。クイーンズランドからいらっしやる女性は、体に障害のある方と聞いていますが、「障害を持つ人々のための年」である今年だけに、みんな彼女の参加により深い意義を感じています。

コースが始まってからは、毎朝世界情勢を知るための時間が設けられるとのことなので、その準備として、シェパード氏が二度ほど、「英字新聞読み方講座」を日本人のために開いて下さいました。テンプルいっぱい新聞を広げて熱心に教えて下さるシェパード氏の親切がうれしく、おかげで新聞の置いてあるラムジュールムに入る回数も増えてきています。（相変らずJAPANの一語を探し求めてページをめくる作業がほとんどではありませんが……）

アーマから、メルボルン名物のチンチン電車で三十分の所に第二のアーマができてつりあます。このアパートは、親切な方が六ヶ月間、MRAのために貸して下さっているものです。それをMRAハウスとして使う際に必要なものを知るため、私は一月の中旬から二週間、実験的にそこに住んでみました。しかし、毎日アーマに通っていつも重い荷物をかかえて帰るといふその生活は、初めのうちあまりおもしろいものではなかった



のです。アーマの人々とのすれ違いと、身を置く場所のなさを寂しく思った私は、「これは、常に規律正しい団体生活を強いられるアーマの生活から離れて息を抜くいい機会ではないか。」と思いつき、おもいきり遅寝、遅起きを心掛け始めました。すると数日後、お昼過ぎに起きてきた私に、一語に住んでいたバラがふとこう言ったのです。「千恵、あなたそんなに寝ていて楽しい？」私は即座に、朝寝を心から楽しんではいなかった

自分へ気づきました。その日はたまたま休日でしたが、それでも反論しなかったのは、いつまでもその家に心向けようと思わず、後の人々のためにそこを住みやすくするという義務を怠りがちだったことに、きっと良心の呵責を覚えていたからでしょう。MRAを支持して下さる方からの素晴らしい贈り物であるそのアパートに最初の住人として住み、そこをお世話できる光栄に改めて気づいた私は、その日バラとともに八時間かけて家中を磨きあげました。その結果、通称「ホコリ屋敷」はなかなか快適な住みこちとなり、私に満足感と去り難き思いとを与えてくれるほどになりました。このアパートは、人々がたくさん訪れるスタディコース中に、MRAハウス別館として大きな役割を果たしてくれるはずです。

今ここにこうしているのは、以前アーマに滞在し、やはりスタディコースを受けた二人のいとこが、当時苦境にあったにもかかわらずいきいきと暮らしているらしいことに驚き、私が自分からMRAに興味を持ち始めたのが発端でした。いとこ達だけに限らず、世代や国籍、宗教の違いを越えてたくさんの人々を引きつけるこの運動とその考えとを学ぶのに、このスタディコースへの参加はいい機会に違いありません。去年私はインドにて、この世界に住む多くの人々が、自分の考えていたよりももっとずっと貧しいことを知り、非常に衝撃を受けました。ですから、特に、あの貧富の差を埋めるためにMRAがいかなる解決の鍵を握っているかを知りたいと思います。そして同時に、個人として弱いながらもいかに努力し、実践してゆくべきかを学ばねばなりません。

「一隅を照らすもの」——これは、私の高校時代の恩師が教えて下さった言葉です。このスタディコースへの参加が、この広い社会で私の照らすべき小さな一隅を知るための手掛りになってくれることを切に望んでいます。

ゴードン・ワイズ夫妻来日!

○各地で精力的な交流、相互理解の促進に大きな役割りを果たす。
○ワイズ夫人・ユカタに初挑戦!!
○二月二十七日、次の訪問地オーストラリアに向けて無事離日。



「健全な労使関係を支える日本固有の土壌に根ざした文化やアプローチをもっと国際社会のお役に」と語る桑原敬一労働次官。

終始、畳の文化で通したワイズ夫人。市原てるさん、星みや子さんによる“浴衣教室”



御夫妻としては初来日

英国MRA理事長ゴードン・ワイズ夫妻が二月十七日から十日間日本を訪れ、東京・大阪・神戸・京都・浦和・水戸で各方面の方々と親善を深めた。元西オーストラリア州知事を父にもつワイズ氏は政界への懇望も辞して戦後三十余国でMRAフルタイムとして活躍した。特に十二年間にわたってアジアを担当し、日本の国際社会への復帰の橋渡しに大きな貢献をした。一方ワイズ夫人はスコットランドの出身。多くの日本の青年をロンドンのハウスで迎えたこともあって念願の初来日である。

土光会長が稲山経団連会長に引きあわせ

土光敏夫会長と柳沢錬造理事はそれぞれが石川島播磨重工の社長・労組委員長時代からのMRA活動の指導者。この二人の御案内による稲山嘉寛経団連会長への表敬は旧知の間柄であるかのような温い和やかな雰囲気の中で行なわれた。日英自動車摩擦の解消への仲立ち・南北サミットへのアドバイス・ジンバヴェエ平和独立への側面的援助

などのワイズ氏の豊富な体験に稲山会長も熱心に聞き入り、「自由主義経済の枠組の中で、話し合いによる国際的共存の実現」についてのワイズ氏の意見をたずねるなど、予定時間をオーバーする貴重な交歓であった。この他関西では亀井正夫関経協会長・山田稔ダイキン工業会長・阪本勇住友電工会長らと懇談し、国際舞台への日本の積極的参加を呼びかけた。

道正邦彦元官房副長官・桑原敬一労働次官・宮田義二IMF・JCC会長・畑和崎玉県知事といった各界の、国際派の方々ととの会談では国際的な連繋プレーについての具体的な提案が相互信頼に基いた話し合いの中からなされた。

四党十五人の議員とも交流

政経分離の終焉を迎え、政治の国際化が叫ばれる中で国際情勢に関するワイズ氏を囲む機会が幾つか催された。

昨年スイスのMRA政治家会議に参加した原文兵衛議員（自民）は現代社会の考え方の基準になるべきモラルがますます必要であることを強調した。狩野明男議員（自民）は国際交流の

場として御自宅を解放したい、と申し出た。戸叶武議員（社会）はMRAの創始者フランク・ブックマンに同行したインドの四ヶ月間について語り、文明の危機に対する神意を汲んだ、精神革命、について述べた。塚本三郎議員（民社）はかつてのMRA海外視察と民社党結成のエピソードについて語った。田英夫議員（社民連）は最近の英国労働党の分裂状況についてワイズ氏の分析をたずねた。

本郷富士子さん古稀パーティーにも

二月二十六日に古稀を迎えた本郷さんのパーティーには大和一・中島正樹・河原亮三郎氏など多数が出席。ワイズ夫妻は「ペリー提督が西洋を日本へ紹介したのと同じように、本郷さんは多くの日本の代表を欧州へ連れてこられて日本を正しく紹介された。」とMRAの世界家族を代表して挨拶した。

この他、海外MRA留学生の家族なども細かに回られたお二人の訪問は多くの方々に温い思い出を残してくれた。

